「過越の食事を準備する」　2023年11月15日

過越の小羊を屠るべき除酵祭の日が来た。イエスはペトロとヨハネを使いに出そうとして、「行って、過越の食事ができるように準備しなさい」と言われた。二人が、「どこに用意いたしましょうか」と言うと、イエスは言われた。「都に入ると、水がめを運んでいる男に出会う。その人が入る家まで付いて行き、家の主人にこう言いなさい。『先生が、「弟子たちと一緒に過越の食事をする宿屋はどこか」とあなたに言っています。』すると、席の整った二階の広間を見せてくれるから、そこに準備をしなさい。」二人が行ってみると、イエスの言われたとおりだったので、過越の食事を準備した。（ルカ22:7～13）

ユダヤ人は過越祭には必ず過越の食事をする。この祭は奴隷からの解放を記念する民族にとって最も大事な祭で、過越の食事をして、先祖の労苦と喜びを追体験するのである。

イスラエル人は、紀元前18世紀頃は族長ヨセフの功績によって、エジプトでは厚遇されていたが、時代が下がると、徐々に奴隷の身分に落とされていった。紀元前13世紀頃には、泥で藁を捏ね、天日で焼くレンガ造りなどの苦役をする奴隷に貶められ、差別と抑圧の中に置かれていた。そのような時代、モーセが召命を受け、エジプトの王・ファラオに出エジプトを要求するが、底辺労働者がいなくなると、国が立ち行かないので、頑として応じない。諸々の事件の最後に「主の過越」の出来事が起こる。イスラエル人の家の柱と鴨居に屠られた羊の血を塗る。神は、その家を「過ぎ越される」が、血が塗られていないエジプト人の家では、人間も家畜も皆、初子が打たれた。エジプトに悲痛な叫びが上がり、ファラオは出エジプトを許可せざるを得なかった。奴隷からの解放をもたらした「主の過越」が民族再生の原点で、ユダヤ人は「過越祭」を厳格に守り続けてきた。この「主の過越」が歴史的事実だとすれば、神がエジプトの初子を殺すことはあり得ないので、テロリズムであろう。抑圧されたイスラエル人が緻密な計画の下で、初子殺害を敢行したと考えられる。歴史の中で、初めてテロが成功した事例と言えるのではないか。

主イエスは、除酵祭の日が来たので、ペトロとヨハネを使いに出そうとして、「行って、過越の食事ができるように準備をしなさい」と言われた。二人が、「どこに用意しましょうか」と問うと、「都に入ると、水がめを運んでいる男に出会う。その人が入る家までついて行き、家の主人にこう言いなさい。『先生が、「弟子たちと一緒に過越の食事をする宿屋はどこか」とあなたに言っています。』すると、席の整った二階の広間を見せてくれるから、そこに準備をしなさい」と答えられた。二人が行ってみると、主イエスが言われた通りだったので、過越の食事の準備をした。

主イエスがエルサレムに入られる時は、ろばの子が用意されていたように、過越の食事も「水がめを運んでいる男に出会う」と、その人が入る家に、二階の広間が手配されていた。主イエスに好意を寄せる人々がいて、彼らは主イエスの求めに、快く応じていたことが分かる。過越の食事をした二階の広間は、使徒言行録2章1節で「五旬節の日が来て、皆が同じ場所に集まっていると」書かれている、聖霊が下った場所ではないか。ここは、おそらく最初の「家の教会」で、ペトロが牢から解放された時、真っ先に「マルコと呼ばれていたヨハネの母マリアの家に行った（使徒言行録12：12）」と記されている家であろう。マリアは、主イエスに篤い信頼を寄せ、過越の食事をする場所を提供して、聖霊降臨も経験し、その後も、主イエスを信じ従う者たちが集う場所となっていたのではないか。